

資料紹介（植物）

上妻博之氏に届いた牧野富太郎氏からの手紙

上妻博之^{まさゆき}氏（1882-1967）は熊本の植物研究において多大な功績を残し、教員として働きながら植物の調査・研究、後進の指導などに熱心に取り組まれた人物です。昭和6年（1931）に熊本で行われた陸軍大演習の際、天皇陛下を迎えるにあたり県内各地から集められた植物の天覧標本約2万点の同定を行った一人でもあります。上妻氏を中心に作り上げられた「熊本県植物誌」（熊本記念植物採集会、1969年）は、長年の調査や資料収集の成果をまとめたもので、現在でも県内の植物を知る上で重要な資料となっています。

当館では、日本の植物分類学の基礎を築いた牧野富太郎氏（1862-1957）が上妻氏に宛てて送った手紙を所蔵しています。内容は上妻氏が牧野氏から依頼を受けて送った葉や花、種子などに対するお礼や牧野氏が金峰山や天草にある植物を送って欲しいと依頼していることなどで、植物に対する二人の探求心や上妻氏が牧野氏からの依頼に丁寧に応えていたことなどがわかります。手紙の日付によると、牧野氏は当時91～92歳（享年95歳）ですが、その年齢になってもなお植物の研究に情熱を注ぎ、好奇心あふれる様子であったことが窺えます。

現在のように豊富な図鑑や文献は揃っておらず、インターネットやメールによって簡単に情報を得たり、連絡を取り合ったりするのはできない状況で、地方にある植物について尋ね、確認していく作業は、大変な労力と時間を要したものと想像できます。かつての植物学者・研究者たちが一つひとつ調べ、研究成果が蓄積されていった過程の一端を垣間見ることができる貴重な資料です。

（植物担当：山口）



資料紹介（考古）

二本木遺跡群

常設展示室「律令時代をむかえて」というコーナーに、二本木遺跡群の出土遺物が展示されていることをご存じでしょうか。ただ、二本木遺跡群と言われてもピンとこないと思いますが、実は熊本駅周辺に展開する遺跡となります。主に弥生時代後期、8・9世紀、12・13世紀頃に人々の生活が営まれていたことが、開発に伴う発掘調査でわかってきています。

注目すべきは、肥後国産ではない陶磁器類が多数出土していることです。この地が古代から中世にかけて物資が集まる場所であったことを物語っています。さらに遺構に注目すると、整然と並んだ大型の建物が確認されており、古代の役所「飽田国府」の推定地と考えられています。肥後国の中心地である国府をベースに中世までその都市的な場は引き継がれます。中世後半には北東方向に隈本（熊本）城が拠点城郭として成立します。現在の熊本市街地の原型は、この二本木遺跡群から始まったといっても過言ではないのです。熊本駅を訪れる際には、こうしたことを意識すると、いつもの風景が少し変わるかもしれません。なお、本展示は令和5年度中に終了予定です。

（考古担当：下高）



熊本博物館
KUMAMOTO CITY MUSEUM

くまはく NEWS LETTER Vol.10
発行 熊本博物館
〒860-0007 熊本県熊本市中央区古京町3-2
TEL.096-324-3500 FAX.096-351-4257
kumamoto-city-museum.jp



くまはく NEWS LETTER Vol.10

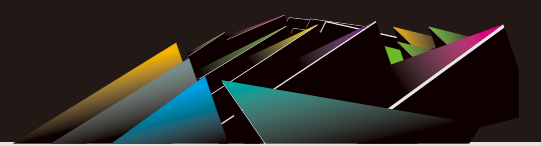
新世界 透明標本展 2023年7月15日～9月3日

熊本博物館
KUMAMOTO CITY MUSEUM

2023年5月

- 特別展案内
新世界 透明標本展
- 企画展報告
熊本城と明治維新
- 通年講座報告
考古学講座
地質学講座
動物学講座
植物学講座
保存科学講座
ゆるゆる美術部

- イベント報告
立田山展講演会
くまはく誕生月間
ハルキウプラネタリウム特別投映
- 資料紹介
上妻博之氏に届いた牧野富太郎氏からの手紙
二本木遺跡群



特別展案内

特別展『新世界 透明標本展』



透明標本は、透明化した筋肉の中に赤く染めた硬骨と青く染めた軟骨が生きていた時のままの配置で観察できる標本です。その美しさは研究用資料にとどまらず、芸術作品と言っても過言ではありません。洗練された骨格の機能美をご覧いただき、進化の歴史と生物多様性の面白さを感じていただきます。

(動物担当：清水)

企画展報告

企画展『熊本城と明治維新』



企画展「熊本城と明治維新 藩から県へ、そのとき城は？」では、名城として名高い熊本城が、明治維新という巨大な変革によって迎えた大きな変化に注目しました。初公開の古文書を多数含む、全42点の資料を展示しました。「こんなに古文書が多いと観覧者は疲れてしまうだろうか…」という担当者の心配は杞憂に終わり、多くの方が熱心に観覧されていたのは嬉しい驚きでした。幕末維新期に興味をお持ちの方の多さを再確認するとともに、今後も定期的に歴史学分野の研究成果を中心に据えた企画展を考えてまいりたいとの決意を新たにしました次第です。

(歴史担当：木山)

通年講座報告

2022 年度通年講座

2022年度は6分野の通年講座を開催しました。実物資料を前に学芸員が解説を行ったり、野外へ出での観察会や実習形式での体験を行ったり、各講座さまざまな内容で楽しみながら学んでいただきました。

考古学講座 (6回)

土器など出土した遺物の解説を中心に、考古学に関連する分野の情報も取り入れながら、興味を持っていただける内容の講座を行いました。



考古学講座

地質学講座 (5回)

地質年代や熊本市内で見られる見られる地質の紹介、近隣館の展示見学も行いました。受講生からの標本の持ち込みもあり、担当者自身も学びの多い講座でした。



地質学講座

動物学講座 (6回)

小学生から大人まで幅広い世代にご参加いただきました。動物としてのヒトが自然といかに関わるべきか?を常に意識しつつ、身近な動物について学びました。



動物学講座

植物学講座 (5回)

身近な野草や樹木、外来生物や生物多様性などをテーマに、室内学習と野外観察会を行い、最終回には講師の先生をお迎えして薬用植物の講演会を行いました。

保存科学講座 (5回)

文化財の科学的な調査方法や、お家にある資料の保存方法など幅広い内容を紹介し、文書などの紙資料に関する修理方法も体験していただきました。



保存科学講座

ゆるゆる美術部 (2回)

あまり知られていない熊本博物館所蔵の美術工芸品の紹介と企画展「あつまれ! 地域の宝もの」の展示解説を行いました。

イベント報告

講演会『立田山ってどんな山? 動物たちの今むかし』

3/18から5/14にかけて開催した企画展「立田山 身近な自然の魅力」。立田山の成り立ちや変遷、生息している生きものなどを紹介した展示室では、地形模型のプロジェクションマッピングや昆虫、どんぐりの標本に張りついて見ている子どもたちの姿や、普段はなかなか出会うことができない野生動物の剥製(はくせい)に興味津々な様子も印象的でした。関連イベントの講演会は、安田 雅俊 氏(国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所)を講師にお迎えし、立田山の自然環境や生息している哺乳類などについてお話しいただきました。調査で得られた結果やデータとあわせて、実際に確認された動物たちの写真や動画なども見せていただき、日頃からさまざまなフィールドに足を運んで調査されている先生から直接お話を聞くことができる貴重な機会となったのではないかと思います。



講演後にはたくさんの質問があがり、子どもたちの素朴な疑問から、生きものの生態や特徴に関することまで分かりやすくご回答いただきました。また、講師の先生と当館の動物担当学芸員との「フィールドで動物のフンを見つけたときの行動」トークも飛び出し、みなさんには最後までお楽しみいただけただけではないかと思います。終了後も、講師の先生の周りにはたくさんの人が集まり、動物談義に花を咲かせていました。今回の企画展やイベントを通して、立田山は幅広い世代に愛されている大人気スポットであると再認識しました。

(植物担当：山口)

くまはく誕生月間



1952年2月に開館した熊本博物館は、毎年2月を「くまはく誕生月間」として、担当分野ごとにさまざまなイベントを企画しています。今年度は期間中3回で来館いただいて、博物館のスタンプをゲットした方に三葉虫の化石をプレゼントいたしました! ホンモノの化石をゲットできるということで、多くの方にご参加いただきました。ありがとうございました!



今年度のイベントでは、熊本城内を散策して明治維新に関するスポットをめぐったり、石垣の見方を考古学的に解説したり、双眼鏡を使った野鳥観察などのフィールドワークも多めで、多くの方に面白いポイントをお伝えできたのではないかと思います。なかでもバックヤードツアーでは民俗担当の学芸員とともに、普段見ることのできない博物館の裏側や収蔵庫の見学、資料の解説なども行い、多数の収蔵資料の管理方法を見ていただきました。



イベントを通して、参加していただいたみなさんの楽しそうな表情を見ることができたのがとても印象的でした。また、来年度も実施予定ですので、ぜひともご参加くださいね!

(保存科学担当：坂本)

ハルキウプラネタリウム特別投映



2月23日(木・祝)に「ハルキウプラネタリウム特別投映」を実施しました。この投映ではウクライナハルキウ州・ハルキウプラネタリウムの解説員で、現在東京に避難をされているオレナ・ゼムリャチェンコ氏、オレナ氏と共に避難しているミハイル・ゼムリャチェンコ氏、通訳のマリナ・ノーキシア氏をお迎えしました。オレナ氏からはハルキウプラネタリウムの歴史や取組の紹介、そしてウクライナ語での星空解説をしていただきました。また、ミハイル氏からはウクライナから日本に避難するまでのこと、ウクライナの現状についてお話しいただきました。ウクライナの星の伝承は日本では知られていないものが殆どであり、担当も大変勉強になりました。一日も早く、ウクライナの人々が安心してプラネタリウムや星空を楽しめる日が来ることを願ってやみません。

(天文担当：野村)